

重篤ナル膽嚢炎ヲ起シタル篋形二口蟲病ノ稀有ナル 症例ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30871

原 著

重篤ナル膽囊炎ヲ起シタル篋形二口蟲病ノ
稀有ナル症例ニ就テ。

金澤醫科大學山田内科教室(主任山田教授)

八 田 俊 之

緒 言

篋形二口蟲病ハ我國ニ於テ比較的廣ク分布セル疾患ニシテ、北陸地方ニ於テモ屢々遭遇スル所ノモノナリ。

其ノ動物學的方面ニ於テハ飯島、小林、武藤氏其他多數ノ學者ニナル報告アリ、病理學的及臨床的方面ニ於テモ、山極、桂田、井上、寛氏初メ其他諸家ノ報告枚舉ニ違アラズ。

篋形二口蟲ノ寄生スル部位ハ主トシテ膽道(及ビ臍殊ニ臍管)ヲ擧ゲラレ、ソノ起ス主要ナル變化ハ膽管腔ノ擴大、上皮細胞増殖、及ビ之ニ伴フ結締織ノ増生肥厚ナリ。而シテ膽囊ニ寄生シ該部ニ上述、病變ヲ起スコトアルモ、一般ニ其ノ度強カラザルヲ常トス。篋形二口蟲病ニ於ケル病的變化ハ主トシテ該蟲ノ直接又ハ間接ノ器械的作用ニ基クモノナリトセラル。桂田、布川、中村氏等ハ篋形二口蟲病ニ於ケル膽管炎ノ發起ニ就テ細菌ガ與ルコトアルヲ報告セリ。

(995)

余ハ最近輸出膽道、殊ニ膽囊ニ甚ダ高度ノ増殖性(壞疽性穿孔性)炎症ヲ起シ、臨床上膽囊ノ腫瘍又ハ膽石ヲ疑ハシメ、手術ニヨリテ膽囊壁内ニ飽形ニ口蟲卵介在ニヨリテ招致セラレタル、非細菌性炎症ナルヲ確メ得タル症例ニ遭遇シ甚ダ興味ヲ感セルヨリ此ニ報告セントス。

症 例

患者。松○長○、六十五歳、 令、 絹絲仲買業。

遺傳關係及ビ血族史。

父ガ肝臟病ノタメ五十四歳ニテ死去セル他別ニ特記スベキコトナシ。

既往症。

乳母ニヨリテ哺乳セラレ、幼時麻疹ヲ經過シ、數回種痘善感、小兒期ヨリ健康ニシテ二十三歳ニ結婚セリ、五十二歳ニ肺炎ヲ患ヒ、五十九歳ニ腸「チフス」ニ罹リタリ、花柳病ハ是ヲ否定ス。

現病歴。

大正十四年三月十日頃ヨリ過勞ノタメカ、食後ニ腹部ノ膨滿感アリ、約三週間醫治ヲ受クルモ輕快セズ、他醫ヲ訪ヒテ治療ヲ受ケ、食餌等ニ注意セルモ尙膨滿感去ラズ、五月三日ヨリ殊ニ甚ダシク、上腹部幾分膨隆セリ、五月四日、夜半ヨリ腹部全體殊ニ右上腹部ニ激痛起リ、體動及ビ手ヲ以テ觸レルコトモ困難ナリシガ、然シ其ノ疼痛ハ鈍痛ニシテ他ニ放散傳達スルコトナカリキ、翌五日ニ到リテ壓痛ヲ殘シテ自發痛ハ殆ンド去ル、尙同時ニ右季助部ヨリ上腹部臍ノ右方ニ亘リテ腫痛様ノモノヲ觸ル、ニ氣附タリ。斯クノ如キ状態ヲ持續シ二十五日ヨリ食思不振トナリ、二十六日食慾全クナク僅ニ攝リタル牛乳モ是レヲ嘔吐セリ、尙ソノ頃ヨリ皮膚ガ黃染セルニ氣附キタリ。爾來醫治ヲ受ケツ、アリシモ、黃疸及ビ食思不振、右上腹部ノ腫痛等少シモ輕快セズ、五月二十九日當科外來ヲ訪ヒテ同日入院ス。

主 訴。

黃疸

現 症。

體格中等、營養稍不良、體位ハ能動的臥脊位ヲトリ、皮膚ハ一般ニ深黃色ヲ呈シ、稍乾燥、特殊ノ發疹癩痕、出血等ハ是レヲ認メズ、
 體溫三十六度八分、顔貌ハ正常、瞳孔左右均シク正常反射又尋常、眼球結膜及ビ眼瞼結膜ハ強ク黃色ヲ呈ス。舌ハ少シク乾燥苔ヲ覆ラ
 ズ、齒芽、上顎全部義齒ナリ、硬口蓋及ビ咽頭粘膜共ニ一樣ニ黃色ニ染ル。扁桃腺兩側共ニ輕度ニ肥大ス。脈膊ハ整調、一分時至七十
 六、血壓ハ最大百〇五、最小七十六(「タイコス」脊位右上膊)、呼吸ハ安靜、頻度普通、胸腹型式、頸部、腋窩、肘部及ビ鼠蹊部ニ淋巴
 腺ノ腫大セルモノヲ認メズ。

心臓、打診上濁音界左右共ニ少シク縮小、聽診上各部共ニ心音清澄ニシテ一般ニ弱ク聽ク。肺臟打診上全部稍鼓音ヲ呈ス、肺肝臟境
 界ハ右乳腺ニ於テ、第六肋骨上緣、呼吸性移動約一橫指徑、トラウベ氏半月正常、聽診上全般ニ呼吸音弱シ。

腹部、視診上特ニ膨隆セル如キ部ヲ認メズ。觸診上右上腹部ニ肝臟ヲ觸レソノ下緣ハ右乳線ニ於テ臍ノ高サマデ及ブ、硬度少シク硬
 ナルモ表面ハ平滑ニシテ、著明ノ凹凸粗隆ヲ觸知セズ。輕度ノ壓痛アリ。肝臟下緣臍ヨリ右約四乃至七糎ノ部ニ小兒手拳大ノ硬キ彈力
 性ノ腫瘤ヲ觸知ス。壓痛著シ。呼吸性移動著明ナラズ。胃部壓痛抵抗等ナク脾臟及ビ兩側腎臟ハ是レヲ觸知セズ。四肢浮腫ナク、一般ノ
 腱及ビ筋肉反射正常運動知覺ニ異常ナシ。

糞便所見。 黃褐色ニシテ稍硬ク、血液反應弱陽性、鞭蟲卵ヲ少許ニ認ムルノミ、脂肪便ノ如キ觀ヲ呈セズ。

尿所見。 「ビール」様黃褐色ヲ呈シ、泡沫ハ輕度ニ黃染ス。比重一〇一九(攝氏十五度)、蛋白反應陰性、「ビリルビン」反

應(グメリン氏法、中山氏法)弱陽性、「ウロビリリン」及ビ「ウロビリノーゲン」反應共ニ陽性、エールリツヒ氏「デアツオ」反應陰性、「イ
 シンヂカン」反應(オーベルマイエル氏法)弱陽性、血液反應陰性、尿沈渣少許ノ黃染セル變性腎上皮細胞ヲ認ムルノミ。

血液所見。 赤血球數四・八五〇〇〇、白血球數七一〇〇、色素量(サーリー)八〇%、色素係數約一・〇、白血球百分率ハ中性
 多形核白血球七一%、「エオジン」嗜好性多形核白血球六%、大單核細胞及ビ移行型七%、淋巴球一六%。

胃液所見(長與氏法) 水様半透明、臭正常、食物殘渣約五十立方糎。總酸度七十五、遊離鹽酸四十五、乳酸反應陰性、「ビリルビ
 ン」及血液反應陰性、顯微鏡の所見ニ特別ノ變化ナシ。

ワツセルマン氏反應 陰性。

ボテロー氏癌反應 陰性。

血液ビリルビン試驗(ヒーマンヴァンデンベルグ氏法)

直接試驗弱陽性(ツワイファアージツシエ、フェルツエーゲルト)

原著 八田重篤ナル膽囊炎ヲ起シタル鈍形ニ口鼻病ノ稀有ナル症例ニ就イテ

間接試験 士、

胃レントゲン所見。 早朝空腹時粥狀造影劑ヲ以テ檢スルニ、胃ハ鉤型ヲ呈シ、尾極ハ臍部ニ一致ス、蠕動ハ少シク強キモ逆蠕動ヲ認メズ。幽門ハ不整形ニシテ、ソノ部ハ細キ莖狀ヲナシテ肝臟下面ニ連レリ。呼吸運動ニヨリテソノ部ハ明カニ肝臟ト共ニ上下スルヲ認ム。造影劑ノ十二指腸ニ到ル通過ハ極メテ遅延ス。

經過並ニ處置。

(六月二日) 他覺的ニハ變リナキモ、自覺的ニ食思幾分増進シ、氣分爽快、尿ハ黃褐色泡沫ハ極メテ輕度ニ黃染シテ「グメリン」氏反應痕跡陽性。

(六月五日) 自覺的ニ益々良好、皮膚黃色度變リナシ。

尿所見。黃褐色稍濁濁シ、中性、比重一〇一五(攝氏十五度)蛋白並ニ糖陰性、「ビリルビン」反應(「グメリン」氏法、フツペルト氏法、中山氏法沃度法共ニ)陰性、「インヂカン」反應(「オーベルマイエル」氏法)痕跡陽性、デアツオ反應陰性ナリ。

糞便所見。 黃色軟、鞭蟲印ヲ認メルノミ。

十二指腸「ポンプ」ヲ嚥下セシメテ、三時間二十分後ニ酸性ノ膽汁約五十立方糲ヲ出シテ後「アルカリ」性トナル、二十五%硫酸「マグネシヤ」殺菌水溶液四十立方糲注入シ、微ニ絮片狀物ヲ混ズル帶縁黃色半透明液約七十五立方糲ヲ出シ、一時間後ニ酸性ニ變ズ、所謂B膽汁ヲ得ル能ハズ。採取液ヲ顯微鏡的ニ檢スルニ、少許ノ白血球及變性上皮細胞ヲ認メタルモ、微生物、寄生蟲卵ハ證明セズ。細菌培養陰性。

(六月六日) 糞便ヲ檢スルニ、膽石、膽砂等認メラレス、鞭蟲卵少許ニ認メラレルノミ。尿ハ「グメリン」氏反應陰性。皮膚ノ黃疸ハ變化ナシ。

(六月七日) 糞便所見同上、他覺的自覺的症狀ニ變化ナシ。

(六月八日) 十二指腸「ポンプ」ニヨリテ約四十立方糲ノ黃色半透明「アルカリ」性液ヲ得、顯微鏡的検査上少許ノ白血球上皮細胞及ビ食物残渣ヲ認メラレ、細菌培養陰性。

(六月九日) 午後ヨリ右上腹部殊ニ膽囊腫痛部ニ自發痛ヲ訴ウ。肝臟部殊ニ臍ノ右方三、乃至七糲ノ部ニ壓痛著明ナリ食思減退。

(六月十日) 症狀前日同様ニシテ、壓痛益々甚ダシク、黃疸甚ダ増悪シ、全身ニ輕度ノ搔痒感ヲ訴ウ、尿ハ褐色ノ度強ク「グメリン」氏反應強陽性、体温、午前三十七度、午後三十七度二分、食思全クナシ。

(六月十一日) 腹部壓痛ハ減少セルモ、黄疸益々増悪シ、尿ハ黒「ビル」様泡沫ハ深黄色ヲ呈シ、グメリン氏反應強陽性、血清「ビ
ルビン」反應(ヴァンデンベルグ氏法)、直接試驗(ブムロプト)強陽性。

(六月十二日) 同上糞便灰白陶土様ニシテ硬。

(六月十五日) 他覺的、自覺的ニ前述同様。

(六月十八日) 十二指腸「ポンプ」ニヨリテ五十立方糶ノ三十三%殺菌硫苦水注入後「アルカリ」性水様白濁ノ液少量ヲ得タルノミニシ
テ全ク膽汁ヲ得ル能ハズ、十二指腸液ハ顯微鏡検査上、白血球及ビ上皮細胞少許ヲ認ム。

(六月十九日、二十日、二十一日、) 他覺的、自覺的ニ同上、尿及ビ糞便所見モ又同上ト變化ナシ。

以上ノ如クニシテ症狀著シキ變化ナク、他覺的ニ腹部所見、肝臟及ビ膽囊腫瘤反ツテ増悪セル感アリ。黄疸モ益々
ノ度ヲ増ス、且ツ食思不振依然トシテ存ス。即チ臨床的ニ完全ナル總輸膽管閉塞ノ症狀ヲ呈シ、膽囊腫瘤ハ彈力性强キ
モ唯單純ナル膽囊水腫ノ如キ場合ト異リ囊壁硬ク恰モ瘤腫様ニ考ヘラル。(七月二十日)膽石症ノ診斷ノ下ニ、泉外科
ニ於テ泉教授執刀ノ下ニ膽囊摘出術ヲ施行ス。茲ニ泉博士ノ好意ヲ感謝ス。手術時ノ所見ヲ概略記センニ。

手術時所見

肝臟ハ腫大セルモ外見シ得ル範圍ニ於テハ、表面平滑ニシテ肝臟下縁モ著變モ認メズ。

膽囊ハ著シク擴大シテ、膽囊底強ク肝臟下縁ヨリ突出シ彈力性ニシテ硬ク、穿刺ニヨリ大量ノ帶綠暗黑色甚ダ粘稠
ナル膽汁ヲ得。膽囊體部前壁ハ全ク肝臟下面ト密ニ癒着シテ、後壁ハ底部及ビ體部ニ於テ諸所大網ト癒着シ、就中膽
囊底部ハ可成廣ク密ニ大網ト癒着ヲ營ミ、底部殊ニ膽囊底後壁ノ一部ニ於テ癒着セル大網ハ一部膽汁色ニ染リ、且ツ
少量ノ膽汁其ノ間隙ヨリ漏出シテ汚染セラレタルヲ見ル、即チ穿孔性癒着ヲ示ス。

膽囊管、肝管及ビ總輸膽管ハ甚ダ肥厚シテ、其ノ太サ小指大ニ及ビ、之ヲ觸ル、ニ甚ダ硬ク、強ク癢痕狀ヲ呈ス。
膽囊ヲ切除シ、肝管ニ消息子ヲ通ズルニ多量ノ粘稠ナル白色半透明内ニ多數ノ灰白色微粒子ヲ含メル白色膽汁ヲ出ス。
灰白色微粒子ヲ鏡檢スルニ、無數ノ筧形二口蟲卵ヲ認ム、總輸膽管ニ消息子ヲ通ズルニカヲモツテ辛ジテ通ズルヲ得

タリ。穿刺膽汁ニ於テハ窠形ニ口蟲卵ヲ認メズ、細菌培養陰性ナリ、而モ膽囊中ニハ豫期セル膽石ノ存在ヲ認メズ。手術ヲ終リテ翌朝不幸ニシテ心臟衰弱ニテ鬼籍ニ入ル。

膽囊肉眼の所見。

膽囊ハ大ニシテ長徑八・五糎、横徑五・五糎、囊壁ハ甚ダ肥厚シ、彈力性强クシテ硬シ。切口ニ於テ壁ノ厚サハ〇・七糎乃至〇・五糎、粘膜〇・二―〇・一糎、囊壁ノ性状ヲ檢スルニ、主トシテ纖維性結締織ヨリナレドモ、所々殊ニ肥厚著シキ部ニ大小斑狀ニ且ツ不平等ニ黃味ヲ帶ビテ溷濁セル部散在セルヲ認ム。内面ハ強ク膽汁色ニ染リ、網様ノ像ハ一般ニ不分明ナリ。前壁ニ當リテ小ハ半米粒大ヨリ大ハ大豆大ノ淺キ物質缺損數個アリ、ソノ底面ハ暗綠赤色ヲ呈ス。膽囊底部後壁ニ近ク存スル一物質缺損ハ大ニシテ、且ツ深ク消息子ヲ通ズルニ明カニ穿孔セルモノナルコトヲ認ム。外面ニ於テハ所々大網ト癒着シ、上述穿孔ヲ示セシ部ニ於テハ殊ニ著明ナリ。前壁ハ肝臟下面ト癒着セリ。

膽囊組織學的検査。

檢材 「フオルマリン」液ニ固定貯藏シ、凍結法、「ツエルロイヂイン」包埋法、一部分「バラフィン」包埋法ヲ用ヒ、染色ハ「ヘマトキシリン」單染色、「ヘマトキシリン」―「エオジン」重染色、ワイゲルト氏彈力纖維染色法、ワンギーン氏結締織染色法、及ビ「ズダン」Ⅲ脂肪染色法ヲ行ヘリ。

膽囊ノ組織學的所見。

「フオルマリン」液ニ固定貯藏セルタメ膽囊ハ扁平トナリテ、全ク前後兩壁ニ分タル。故ニ便宜上以下記スル膽囊組織學的所見ハ一、前壁所見、二、後壁所見、三、膽囊頸部所見ノ三部ニ分チ、更ニ前壁ハ肉眼の所見ニヨリテ區別シテ甲、乙、丙、三部ニ分チタリ。

一、膽囊前壁

甲、内面ニ肉眼の物質缺損無キ部。

イ、粘膜層 上皮層ハ皺壁ヲナシテ表面高キ柱狀上皮細胞ヲモツテ覆ハレ、上皮細胞列ハ密ニシテ、上皮細胞ノ核ハ類圓形乃至橢圓形ニシテ細胞ノ基底ニ近ク存ス。

固有膜一般ニ厚ク、膽囊頸部ニ近ツクニ從ヒテ上皮細胞列ト共ニ皺壁多ク且ツ深シ、絨毛狀突起ノ間ニ上皮細胞ノ腺管腔様排列ノ縦斷面ヲ所々ニ認ム。一般ニ結締織ニ富ミ、殊ニ圓形、類圓形ノ可染質ニ富ム核ヲ含メル結締織形成細胞及ビ有核結締織纖維ノ増生著シ、又所々小圓形細胞ノ浸潤瀰蔓性及ビ集在性ニ存ス。細血管豊富ニ存シソノ充盈強シ。

ロ、筋層 一般ニ鬆粗トナリテソノ間有核結締織纖維結締織形成細胞ヲ見ル、筋纖維ハ束ヲナシテ種々ナル走向ヲ示シ、一般ニ染色良好ナラズ、核ハ長圓形乃至紡錘形ヲ示シ、筋纖維束間ヲ充セル結締織内ニ於テ所々小圓形細胞浸潤ヲ認ム。

ハ、纖維層 甚ダ厚ク結締織増殖強ク殊ニ結締織形成細胞及ビ幼若ナル結締織ノ増生著シ、増殖セル結締織間ニ在リテハ、窠形二口蟲卵在スルヲ認ム。而シテ窠形二口蟲卵ノ周圍ハ結締織ニ富ミ、時ニ小圓形細胞ノ集在スルモノアリ、血管ハ強ク充盈シ小血管固着細胞増殖ス小動脈ハ各層殊ニ内膜及ビ中膜ノ肥厚著明ナリ。

ニ、漿膜下層 鬆粗性結締織纖維ヨリナリ、脂肪細胞著シク増加シ血管ニ富ム。血管壁ハ甚ダ肥厚シ、血管強ク充盈シ而モ所々殊ニ血管周圍ニ小圓形細胞ノ集在スルヲ認メラレ、又一部分充血セル血管周圍並ニ組織内ニ廣汎性ニ出血ヲ認ム。

ホ、漿液膜密ナル結締織纖維ヨリナリ、一般ニ肥厚ス。

乙、物質缺損部ノ近傍ニテ肥厚最モ著明ナル部。

イ、粘膜層 上皮層ハ皺壁ヲナシテ、前述「甲ノイ」ノ場合ト同様高キ柱狀上皮細胞ヲモツテ覆ハル、粘膜上皮一部缺損セル部アリ。固有層ハ厚ク結締織ヨリナリ殊ニ有核結締織ニ富ミ一般ニ小圓形細胞瀰散性ニ浸潤シ一部分集在性ニ存ス。ソノ間「プラスマ」細胞ヲ認メラレ、又諸所ニ黃褐色色素顆粒ヲ含メル大圓形細胞散在性ニ存シ、部分ニヨ

(1001)

リテハ上皮細胞層ノ基底ニ排列シテ存スル部アリ。而シテ該細胞ハ可成大ナル細胞ニシテ、核ハ類圓形乃至橢圓形ヲ呈シ、可染質ハ平等ニ分布セラレ、比較的鮮明ニシテ、核小體ハ明カナラズ、原形質ハ豊富ニシテ、上述ノ如キ黃褐色ノ色素顆粒ヲ多數含ム。

或部ニ於テハ甚ダ廣汎性ニ圓形細胞殊ニ「プラスマ」細胞存在シ、廣ク筋層ヲ壓壞シテ纖維層マデ及ベルモノアリ。細血管充盈シ、而シテ所々細血管豊富ニ集在ス。

ロ、筋層 殊ニ鬆粗トナリテ筋纖維束細小ニシテ、且ツ少ク一般ニ硝子樣變性ヲ起シ、前述「プラスマ」細胞浸潤ノ強キ部ニ於テハ破壞セラレテ消失シ、僅ニ一部分纖維層内ニ壓セラレテ存ス、筋束間ハ一般ニ結締組織殊ニ有核結締組織ヲモツテ充サレ小圓形細胞諸所ニ存ス、又上述色素顆粒含有細胞散在シ、強ク充盈セル小血管豊富ニ散在性又ハ限局性ニ存スルヲ認メラル。

ハ、纖維層 肥厚殊ニ著明ニシテ、結締組織ノ増殖甚ダ強ク、就中淺層ニ於テハ比較的結締組織形成細胞及ビ幼弱ナル結締組織増生強ク、「プラスマ」細胞及ビ小圓形細胞散在性或ハ集在性ニ存シ、又黃褐色色素顆粒含有細胞多ク存在シ、ソノ間散在性ニ筧形二口蟲卵多數ニ介在シ、特有ノ形ヲ示シ完全ニ「デツケル」ヲ認メラレルモノアリ。蟲卵ノ原形質ハ收縮シテ一方ニ偏ス、即チ此ノ筧形二口蟲卵ノ存在ヲ多數ニ認ムルハ注目ニ價スル所見ナリ。

ニ、漿液下層 前述、(甲)ノ場合ノ所見ト同様ナリ。

ホ、漿液膜 ソノ所見モ亦前述、(甲)ノ場合ト同様ナリ。

丙、内面ニ肉眼の物質缺損ノ存スル部。

粘膜上皮、固有膜ヨリ筋層マデ完全ニ缺損セリ。而シテ表面周圍纖維層ヨリ少シク高マリテ、全表面強キ細胞浸潤ヲ呈シ、缺損面ハ殊ニ強ク「ヘマトキシリン」ニ染リ胞體ノ像、境界ハ分明ナラズ。斯クノ如ク圓形細胞浸潤強ク他ノ組織像ハ認メラレズ、而シテ一方甚ダ廣汎性ニ充盈セル細血管極メテ多數存在ス、タメニ細胞浸潤ガ反ツテ他ヨリ輕

度ナルヤノ觀ヲ呈スル部アリ。上述浸潤細胞ハ殆ンド全部核ガ所謂車軸狀ニ染マレル、即チ「プラズマ」細胞ナリ、而シテ此ノ間黃褐色素含有細胞、散在性乃至集性ニ存ス。斯クノ如キ變化即チ「プラズマ」細胞浸潤、細血管新生、充血色素顆粒細胞等ノ存在ハ深層ニ至ルニ從ヒテ擴大増加ス。而シテソノ間有核結締組織僅ニ存ス、尙深層ニ及ベバ、強キ「プラズマ」細胞浸潤、色素顆粒細胞、集散、相交錯シテソノ間結締織及ビ結締織形成細胞ノ混在ヲ認ム、更ニ深層ニ於テハ結締織ノ増生肥厚著シク色素顆粒細胞「プラズマ」細胞、散在又ハ集在セルト共ニ窠形二口蟲卵廣ク介在スルヲ認ム、血管又多ク且ツ肥厚著明ナリ。

漿液下膜及ビ漿膜 前記所見ト同様ナリ。

二、膽囊後壁

イ、粘膜層 上皮細胞、所々剝離セル部アリ、固有層ハ結締織形成細胞甚ダ多ク、黃褐色色素顆粒含有細胞存ス。
ロ、筋層 甚ダ鬆粗トナル。

ハ、纖維層 一般ニ淺層ニ於テハ結締織形成細胞及ビ幼若ナル結締織ノ増殖強ク深層ニ及ブニ伴ヒテ結締織纖維増生ヲ認ム。ソノ間色素顆粒細胞甚ダ多ク存シ、多數ノ「プラズマ」細胞、少許ノ「エオジン」嗜好白血球存スルヲ認ム、所々小圓形細胞集在スルアリ。斯クノ如キ細胞浸潤ハ粘膜上皮剝離セル纖維層ニ於テ殊ニ著明ナリ、血管壁ノ肥厚モ亦甚ダ強シ、而シテ結締織纖維及ビ小圓形細胞ニ包マレテ至ル所散在性ニ窠形二口蟲卵介在スルコトヲ證明ス。漿液膜下層及ビ漿液膜 上述、(一)ノ(甲)、(乙)、(丙)ノ所見ト殆ンド同様ナリ。

三、膽囊頸部所見

粘膜層 皺壁甚ダ多ク、且ツ腺管様ノ像殊ニ著明ニシテ深ク、絨毛狀突起ニ況ヒテ柱狀上皮細胞排列シテ密ニ覆ヒ又斯クノ如キ腺管様ヲ呈セル横斷面ヲ多數ニ認ム、膽囊管口ニ近ク所々ルシカ―アシヨフ氏ノ「ガング」ノ存スルヲ認メラレ該腺ハ其ノ排泄管腔少シク擴大セルノ觀アルモ別ニ他ニ著變ヲ認メズ。

膽囊頸部ニ於ケルソノ他ノ所見ハ(一)ノ(甲)ノ所見ト殆ンド一致ス。

四、脂肪染色所見

凍結切片ヲ「ズダン」Ⅲ染色法ヲ施シ、「ヘマトキシリン」核染色ヲ行ヒ「グリセリン」ニテ封鎖シテ檢ス。一般ニ肉眼のニ黄味ヲ帶ビタル斑ニ一致シテ帶黄赤色ニ濃染セル顆粒ヲ以テ原形質ヲ滿サレタル大ナル細胞瀰蔓性ニ而モ所々集在シテ甚ダ多數存シ、該細胞ノ核ハ比較的鮮明ニシテ類圓形乃至橢圓形ヲ呈ス。而シテ原形質ハ上述ノ如ク密ニ帶黄赤色ニ美麗ニ染マレル小顆粒時ニ滴ヲ含ミ、同時ニ黄褐色ノ色素顆粒ヲ含有スルヲ認ム。而シテ細胞内ニ「ズダン」Ⅲ好染顆粒ノ存スル度ハ一定セザルモ一般ニ纖維層ニ於テソノ度著明ナリ、而シテ斯クノ如キ中性脂肪顆粒ハ廣ク結締織内ニ存シ、又間隙ニモ認めラル。粘膜固有層ニ於テ脂肪顆粒ト黄褐色色素顆粒トヲ含有セル細胞又上皮細胞基底ニ近ク排列セル部アリ、諸所上皮細胞基部核ノ周圍ニ脂肪顆粒ヲ含有ス、物質缺損部細胞浸潤内ニモ上述中性脂肪顆粒含有細胞散在スルヲ認ム。漿液膜下層ニ於ケル脂肪細胞ハ大ナル脂肪滴ヲモツテ充タサレ、核ハ邊緣ニ壓セラレテ存ス。

五、「ヒヨレステリン」検査

二分極装置ヲ以テ凍結切片、無染「グリセリン」封鎖標本及ビ「ズダン」Ⅲ染色標本ヲ檢スルニ一般ニ肉眼的ニ黄味ヲ帶ビテ「ズダン」Ⅲニ好染スル部ニ相當シテ美麗ニ復屈折ヲナス結晶形乃至滴狀物一部分十字狀滴ヲナス物質甚ダ多數存スルヲ見ル。即チ上述脂肪顆粒含有細胞ノ集在セル部ニ於テ最も多ク其他一般ニ散在性ニ存シ、一部分上皮細胞内ニ存スルヲ認ム、之ヲ加温シテ檢スルニ之等復屈折ヲナス物質ハ一時消失シテ又漸時特有ノ美麗ナル十字狀滴ヲナシテ出現ス、即チ「ヒヨレステリンエステル」ナルコトヲ知り得ベシ。

膽囊所見概括

膽囊ハ強ク擴張肥大シ壁ノ肥厚甚ダ著明ニシテ○七—○五糎(正常ノ膽囊一五糎—一糎、ヤノースキー氏)粘膜

○二一〇・二種(普通)○三一〇・五耗ヤノースキー氏ニ依ルヲ算ス。一般ニ彈力性强ク硬ク觸レ組織學的ニ筋層以外各層共ニ肥厚シ、殊ニ纖維層ニ於テノ度著明ナリ、小圓形細胞浸潤並ニ廣汎ナル「プラスマ」細胞ノ浸潤アリ結締組織增生シ、殊ニ結締組織形成細胞及ビ幼弱ナル結締組織ノ增殖著シ、而シテ血管新生多ク充血強ク小血管固着細胞ノ肥厚増殖アリ、穿孔及ビ内面物質缺損認メラレ該部ハ粘膜ヨリ筋層マデ缺損シ、細胞浸潤甚ダシク又血管新生著明ナリ。所々殊ニ漿液膜下層ニ於テ血管周圍ノ出血ヲ認メラル、而シテ黃褐色色素含有細胞各層ニ彌散性又ハ集在性ニ存シ、殊ニ纖維層ニ於テ甚ダ多數存ス。斯クノ如キ細胞ハ同時ニ中性脂肪顆粒ヲ含有ス、該細胞ハ膽囊固有ノモノニアラズシテ他ヨリ遊走シ來レル組織球細胞ニシテ黃褐色顆粒ハ膽汁色素ナリ、又脂肪顆粒ハ結締組織内及ビ間隙ニモ存シ一部上皮細胞内核ノ周圍ニモ存在ス。

而シテ纖維層内ニ廣ク籠形二口蟲卵介在シテ蟲卵ハ増殖セル結締組織ニ包マレ或ハ蟲卵周圍ニ小圓形細胞集在ス、此ハ膽囊ノ組織學的所見ニ於テ最モ注目セラレル所ナリ。

分極裝置ヲ以テ檢スルニ「ヒヨレストリンエステル」ノ多量ノ存在ヲ證明ス。

之ヲ要スルニ膽囊ハ其ノ所見上高度ノ慢性増殖性ノ炎症ニシテ膽汁長時ニ亘リテ鬱滯滲溜シ、壞疽性穿孔ヲ來シ大網肝臟表面腸管等ト癒着ヲ來シ、穿孔ノ幸ニシテ癒着局限セルモノナルコトヲ知ル。而シテ上記膽囊炎ハ細菌學的檢査上非細菌性炎症ナルコト明カニシテ全ク籠形二口蟲ニ原因セル慢性ノ膽囊炎ニ外ナラザルナリ。

總括的卑見

上述セル總テノ事項ヨリ本例ヲ考察スルニ、膽囊及ビ肝外膽管ニ於テ高度ノ炎症症狀ノ存在ヲ示セルモ、經過中體溫三十七度ヨリ三十七度二分ヲ示セルコト僅ニ三回、他ハ殆ンド無熱ノ經過ヲトリ十二指腸ヨリ採取セル液ノ顯微鏡的所見及ビ細菌培養上常ニ細菌ヲ證明セズ、又手術時膽囊穿刺ニヨリテ得タル膽汁ノ細菌培養陰性ニシテ組織學的所

見ニ於テモ認メラレズ、即チ本例ニ於ケル膽囊炎及ビ膽道炎ハ全ク非細菌性ノ慢性炎症ナリト思考セラル。

更ニ頻回ノ糞便検査及ビ十二指腸ヨリ採取液ノ數回ニ亘ル検査ニ於テ筧形二蟲卵ヲ證明スルコト能ハザリシモ、手術時肝管ヨリ排出セル白色膽汁ニ無數ノ筧形二口蟲卵ヲ證明シ且ツ膽囊壁、蟲卵介在スルヲ見ル時ハ本例ハ筧形二口蟲病ナルコト明カナリ。

筧形二口蟲及ビ卵ニヨリテ膽囊及ビ肝外膽道ニ慢性増殖性炎症ヲ起シ、總輸膽管、肝管及ビ膽囊管ハ結締組織増殖ノタメ癰痕様トナリ、遂ニ狹窄ヲ起シ膽囊ハ膽汁瀦溜ノタメ漸時擴大シテ膽汁輸出道ハ閉鎖ノ結果、輸膽管内結石又ハ腫瘍ノ場合ニ於テ見ラル、如ク膽囊ハ壞疽性變化ヲ來シ、遂ニ穿孔ヲ起シタルモノナラン。

筧形二口蟲病ハ一般ニ其ノ經過極メテ緩漫ナルヲ常トシ、初期ニアリテハ何等自覺的症候ヲ呈セズ。病變ノ進行ト共ニ特有ナル腹部膨滿、肝腫、脾腫、腹水、下痢、浮腫、黃疸、胃腸出血、貧血等主トシテ胃腸及ビ門脈鬱血症候ヲ呈スルモノナリ。

本例ニ於テハ先ヅ初メ頑固ナル腹部膨滿感ヲ起シ次テ食思不振來リ腹部疼痛發作性ニ起ル、筧形二口蟲病ニ來ル疼痛ハ記載ヲ見ルニ肝臟部ニ著シキ壓痛ヲ發スルコト極メテ稀ニシテ一般ニ觸接ニ際シテ輕微ナル鈍痛ヲ訴ヘルニ過ギズト、(井上氏三三三%、寛氏三二%)而シテ自發痛ハ缺除スルヲ常トス、唯續發症或ハ合併症トシテ結石腫瘍等ヲ起シタル時ハ例外ナリ。本例ニ於テハ時ニヨリテ消長アルモ一般ニ強クシテ且ツ常ニ認メラレ、尙二回ノ可成激シキ自發痛發作アリ、即チ膽囊ノ穿孔ト密接ノ關係アリシモノト考ヘラル。

筧形二口蟲病ニ於テハ肝腫ハ中等症以上ノモノニ於テ毎常遭遇スベキ主要症候ナリト云フ、(井上氏五〇%、水野氏三九%、寛氏二〇—九六%)、本例ニ於テハ可成高度ニ認メラレ、ソノ表面ハ一般ニ平滑下縁ハ鈍厚ナラズ。

門脈系統鬱血症候、即チ門脈循環障礙ノ結果トシテ腹水ヲ舉ゲラレ桂田氏ニヨレバ本病主要症候ナリトス。(山極氏七三%、栗本氏二七%、水野氏五七%)次イテ脾腫又門脈鬱血症候ノ一トシテ算ヘラル、頻度ハ諸家ニヨリ區々ナ

ルモ、又屢々見ラレル所ノモノナリ。(桂田氏四〇—二二%)、寛氏二四%、井上氏一〇%)、慢性鬱血性胃腸加答兒又門脈循環障礙ノタメ起ルモノニシテ、其ノ主要症候ハ下痢ナリトス、而シテ以上門脈系統鬱血ハ山極氏ニヨレバ總輸膽管ニ窠形二口蟲寄生ニ因スル充實擴張ヲ以テ甚ダ有力ナル原因ノ一ト認メラレ、桂田氏ハ之ニ反對ノ見解ヲトラレ、即チ肝内肝管枝別ノ寄生ニヨリテ門脈枝ヲ壓迫スルニヨリ起ルモノナラント云ヘリ。ソノ何レニシテモ本例ニ於テハ以上三症候即チ門脈鬱血症候ハ之ヲ缺ケリ。

黄疸(桂田氏四六%)ハ本病ニ於テ最モ主要ナル徵候トシテ擧ゲラル、モノニシテ、一般ニ窠形二口蟲病ノ黄疸ハ其ノ發生原因トシテ山極氏、桂田氏等ニヨレバ膽汁輸出道乃至十二指腸粘膜ノ加答兒性腫脹或ハ蟲體自己ノ膽汁輸出ヲ障礙スルニ基因スルモノトセラレ輕度ナルヲ常トス。本例ノ場合ノ發生理由ヲ考察スルニ、輸膽管ノ高度ノ慢性結締織増殖性炎症ノ結果増殖セル結締織ハ癥痕ヲ形成シ遂ニ狭窄ヲ起セルタメニ膽汁排泄困難トナリ黄疸ヲ發生セシモノナラン。而シテ第二回ノ疼痛發作ノ際ヨリ急激ニ黄疸増悪シテ膽汁腸管ニ排出スルコト全ク停止セルコト、及ビ手術時ニ大量ノ白色膽汁ヲ出シタルコトハ總輸膽管ノ完全ナル閉塞ノ可成長時ニ亘リテ存シタルコトヲ證明スルモノナリ。而シテ手術時ニ總輸膽管ガ辛ジテ消息子ヲ通ジ得タルコトヨリ考ヘテ恐ラク總輸膽管ノ高度ノ癥痕増殖及ビ狭窄ノタメ捻折セルモノナラント想像セララル。

窠形二口蟲病ニ於ケル血液像ニ就テハ文獻ニヨレバ或ハ赤血球及ビ血色素量ノ減少、白血球數ノ増加ヲ認メ或ハ白血球中、中性多形核白血球ノ減少「エオジン」嗜好性白血球ノ増加ヲ主張シ、又以上ヲ全然否定スルアリ要スルニ區々トシテ決定セザルモ本例ニ於テハ只「エオジン」嗜好性白血球ノ多少増加セルヲ見ルニ過ギザリキ。

尙窠形二口蟲病ニ於テハ續發症トシテ膽石症、肝臟ノ癌腫、肉腫、囊腫等ヲ擧ゲラレ吾人モ屢々見ル所ノモノナリ。本例ニ於テ始メ膽石或ハ膽囊腫瘍ヲ疑ヒタルモノナルモ、膽囊ノ病理學的檢索ニ際シテ全ク癌腫或ハ肉腫ノ如キモノニアラズシテ、窠形二口蟲ノ刺戟ニヨル慢性増殖性變症ナルヲ知レリ。

原著 八田ニ重篤ナル膽囊炎ヲ起シタル窠形ニ口蟲病ノ稀有ナル症例ニ就イテ

之要ニ本例ハ窠形ニ口蟲病文獻上例ヲ見ザル點ニ於テ甚ダ興味ヲ有スルモノナリ。

結 論

一、本例ハ臨床上膽石乃至膽囊癌ト誤診セラレタル窠形ニ口蟲病ナリ。
 二、肝外膽道ニ於ケル變化ハ窠形ニ口蟲ニ依ル高度ノ慢性増殖性炎症ナリ。
 三、膽囊ニ於ケル病變ハ殊ニ著明ニシテ病理學的組織變化ハ慢性増殖性壞疽性穿孔性炎症ノ像ヲ示シ、纖維層ニ於テ多數ノ窠形ニ口蟲卵ノ介在セルヲ認ム。

四、膽道及ビ膽囊炎ハ細菌ニ原因セルモノニアラズ。

五、本症ニ於テハ門脈鬱血症候ハ之ヲ認メズ。

六、總輸膽管ハ臨床上完全ナル閉塞ヲ來セリ。

七、黄疸ハ甚ダ頑固ニシテ其ノ發生原因トシテ膽道ニ於ケル結締組織増殖性癒痕收縮ニヨル狹窄ガソノ主要ナルモノト考ヘラル。

終リニ臨ミ病理學的檢索上種々御助言ヲ賜リタル本學病理學教室中村教授並ニ同教室員諸賢ニ深ク感謝ノ意ヲ表ス。

参 考 書 目

- 1) **Ph. Stoehrs**, Lehrbuch der Histologie S. 281.
- 2) **Ludwig-Aschoff**, Pathologische Anatomie II Bd (1921) S. 935.
- 3) **Kaufmann**, Spezieller Pathologische Anatomie (1922) S. 768, 782.
- 4) **W. Janowski**, Über Veränderungen in der Gallenblase bei Vorhandensein von Gallenstein. zit. nach E. Ziegler Beiträge zur pathologischen Anatomie und zur Allgemeinen Pathologie. Bd. 10 S. 449.
- 5) **L. Bodnar**, Cholecystitis cystica. zit. nach Virchow Archiv. 1922. Bd. 288 S. 359.
- 6) **Quinke, Hoppe, Seyler**, Krankheiten der Leber S. 195, 600.

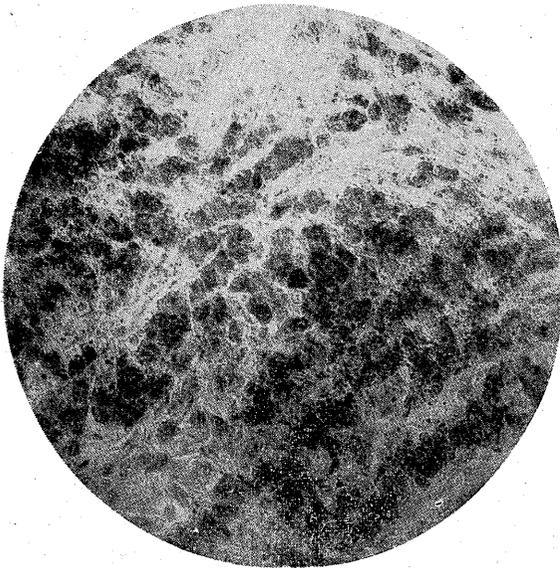
圖 一 第



潰瘍面

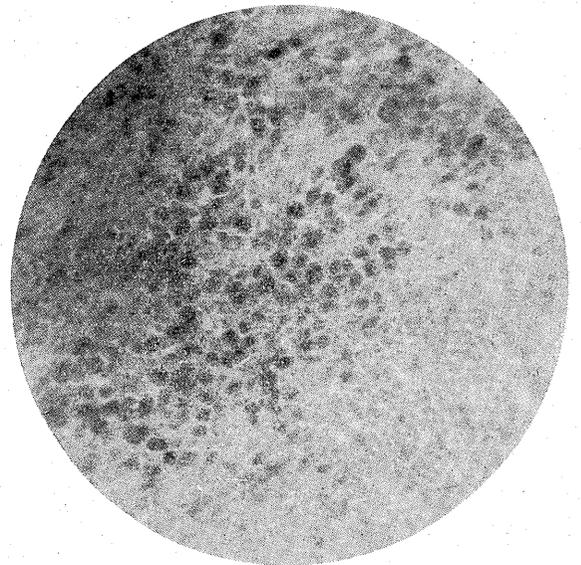
(顯微鏡ツアイス. 接物鏡 10. 接眼鏡 5)

圖 三 第



纖維層ニ於ケル脂肪顆粒含有細胞染色
(顯微鏡ツアイス. 接物鏡 20. 接眼鏡 20)

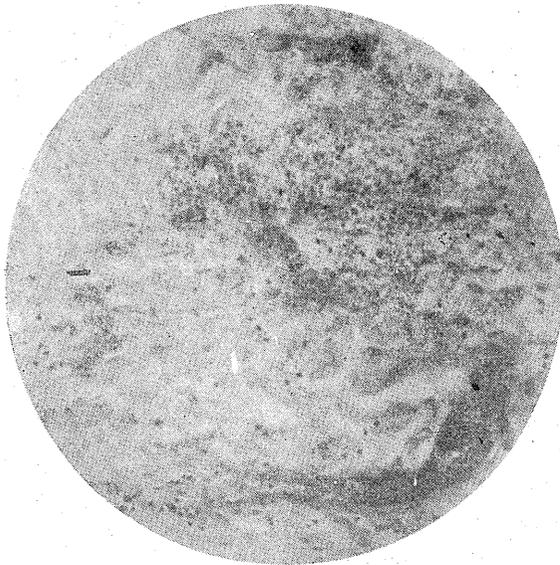
圖 二 第



胆汁色素ヲ含メル細胞

(顯微鏡ツアイス. 接物鏡 20. 接眼鏡 10)

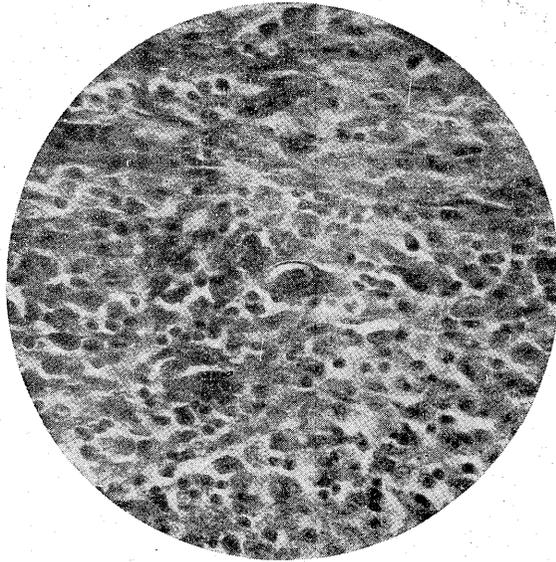
圖 四 第



漿液膜下出血

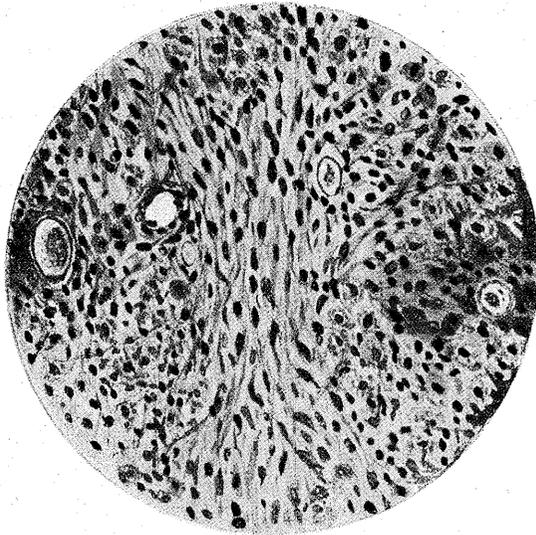
(顯微鏡ツアイス. 接物鏡 20. 接眼鏡 10)

圖 五 第



増殖セル囊壁(纖維層)中ニ介在セル窠形二口蟲卵
(顯微鏡ツアイス. 接物鏡 20. 接眼鏡 20)

圖 六 第



窠形二口蟲卵
(ヘマトキシリン. エオジン染色)

- 7) **F. Katsurada**, Beitrag zur Kenntniss des Distonum spatulatum. zit. nach Ziegler Beiträge zur Path. Anatomie und Allg. Pathologie. Bd. 28. 1900 S. 479.
- 8) **K. Yamagiwa**. Einige Bemerkungen zuden Aufsatz des Herrn Katsurada Beitrag zur Kenntniss des Distonum Spatulatum (Ziegler Beiträge Bd. 30. 1901 S. 155)
- 9) **F. Katsurada**. Einige Worte der Erwiderungen an Heza Yamaagiwa. (zit. nach Ziegler Beiträge Bd. 30 1901 S. 163)
- 10) **小林, 桂田, 寛** 最新鏡形二口蟲病論, 日新醫學定期増刊(大正十一年十月)。
- 11) **中村八太郎** 鏡形ガストマ病論補遺(極メテ多數ノ鏡形ガストマヲ寄生セシメタル肝臟ノ變化ニ就イテ)(京都醫學雜誌, 第五卷第一號)。
- 12) **中村八太郎** 鏡形ガストマ病論補遺(極メテ多數ノ鏡形ガストマヲ寄生セシメシ例)(京都醫學雜誌, 第五卷第一號)。
- 13) **布川興作** 鏡形肝腫病ノ一例, 醫事新聞, 七〇二號ノ七, (明治三十九年一月)。
- 14) **桂田富士郎** 鏡形二口蟲寄生ト膽石成生トノ關係, 岡山醫學會雜誌, 第一〇二號, (明治三十年)。
- 15) **川村麟也** 顯著ナル脾腫ヲ保チ肝ガストマ症ニ就イテ, 北越醫學會雜誌, 第三十二年第三號, (大正六年)。
- 16) **戸出重平** 鏡形二口蟲病患者血液所見ニ就イテ, 岡山醫學會雜誌, 第三七六號, (大正十年)。